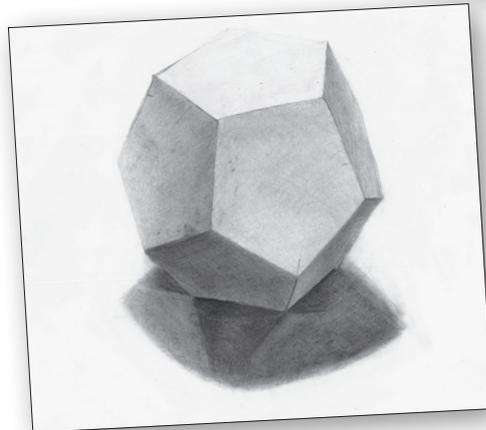
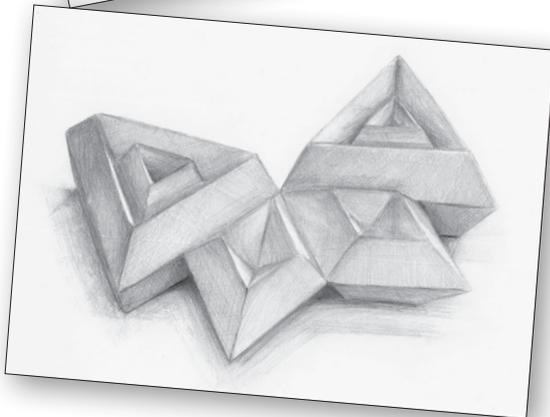
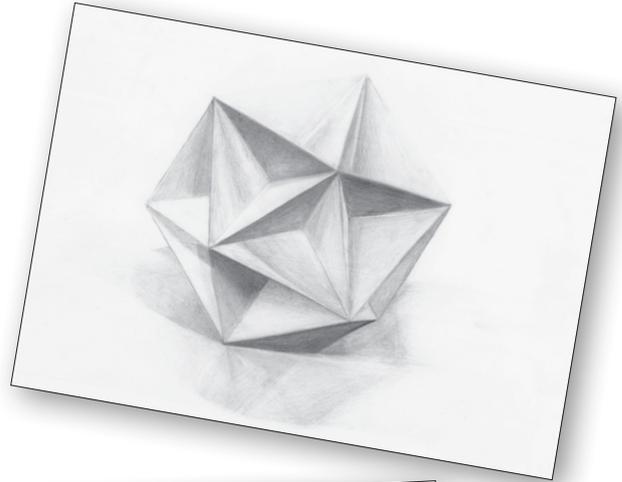
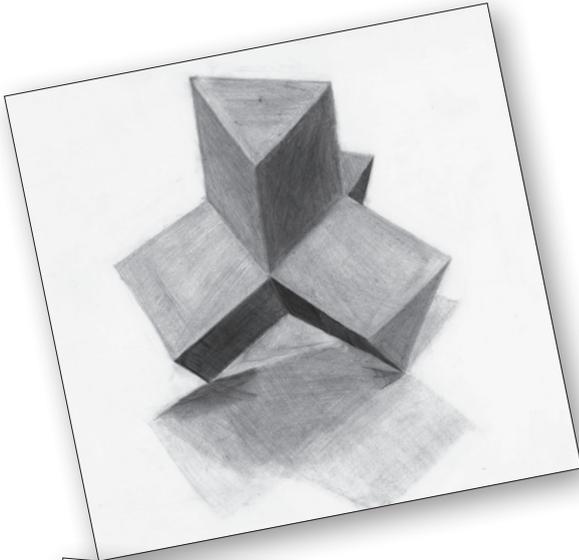


図書館だより

Library News No.83

National Institute of Technology (KOSEN) , Nara College

2026年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙絵は1 S平井志穂さん(左上)、1 M西山綾乃さん(右上)
1 E田中真央さん(左下)、1 E瀧川真心人さん(右下)の作品

表紙絵は美術の授業の作品で教員から推薦された中から教育支援センター運営委員会での投票により選出しています。また、図書館だより掲載ページでは候補作も含めすべての作品がご覧になれます。 <https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/publication/librarynews/>



目次

巻頭言	2
読書感想文コンクール・個人多読・クラス多読表彰について	3
読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文コンクール入賞作品	6
図書委員会の活動について	10
新刊のご案内.....	10
図書委員厳選おすすめ図書紹介	11



巻頭言

「時には非効率を楽しもう」

教育支援センター長 藤田直幸

まだまだ自分は若いつもりでいたのに、かつて自分が見て「おじいさんだな」と思っていた先生方と同じような年齢になり、気づけば定年まで一年になった。実際、かわいい孫もいて「おじいちゃん」と言われている。そんな爺さん先生の私が最近夢中になっているのがAIである。毎日使うようになっていくが、これが便利。すごく便利だ。授業づくりにも活用し、「探究型の課題」を作るには欠かせなくなっている。今年に入り、Pythonで業務を効率化しようと学び始めたが、分からないエラーに悩まされ続けた。そんな折、「企業ではプログラミングにもAIを使っている」と聞き、試しに成績グラフを大量に作るプログラムをAIに頼んでみたところ、半日でプログラムが完成してしまった。「あらら」である。

技術の進歩は、人々のライフスタイルを大きく変える。私が子どもの頃、家に電話もなく、テレビは白黒だった。高専1年生で初めて触れたコンピュータはパンチカード式で、一文字のミスでカードを作り直すという世界だった。1992年に教員になったころも、学生はワープロ専用機で卒論を書いていた。そこからインターネット、スマホ、そして生成AIへ。担任している学生たちと同じ2008年にスマホが誕生したことを思うと、技術の変化の速さにあらためて驚く。昔を振り返り語りだすのは爺さんになった証拠。だが、アナログからデジタルへ移り変わる過程を体感できたことは、電気電子系の教員として幸運だったと思う。

さて図書館だよりなので、読書の話も少し。私は小学生の頃から本が好きで、図書委員をしていた。週末はいつも本を借りて帰っていた。中学・高専では武者小路実篤や太宰治などをよく読み、レポートを書くときは図書館で専門書を借りて調べた。学校の図書館では足らず、大阪の中之島図書館まで行っていた。当時は検索システムもなく、カードの束をめくって本を選び、書庫から取ってきてもらうという、今思えばとても面倒なことをしていた。

ところが最近、自分でも本を読まなくなったなあと思う。調べ物はネット、知識はYouTube。さらにAIを使いだすと便利すぎて手放せない。そこにあるのは、圧倒的なスピードと手軽さだ。手に入る情報量は、昔の何倍、何十倍にもなった。

しかし、不便だった昔を振り返って気づくのは、あの頃手を動かしたり、足を運んだり、頭を絞ったりした「手間」こそが、今でも自分を支える知識や知恵になっているということだ。本をじっくり読むことで、自分の生き方に大きな気づきがあったり、傷ついた心が癒されたりした。本を通して自分と向き合う時間は、決して効率化できるものではない。

AIを使いこなすときにも、実は「順序立ててやってほしいことを伝える論理的な力」が必要になる。成績処理のプログラムを作ってもらうときも、ちゃんと指示を出さないとAIは正しい答えを返してくれない。こうした「本質を見抜く力」や「筋道を立てる力」は、インスタントなネット情報の流し読みだけではなかなか身につかない。

人と直接触れ合うこと、何かに挑戦して失敗すること、そして一冊の本とじっくり向き合うこと。そんな、一見「非効率」に見える時間の中でこそ、自分の血肉となる力がつくように思う。爺さん先生は、アナログな不便さを知る世代でよかったなと思いつつ、最新のデジタル技術も今後も楽しんでいこうと思う。もちろん、この原稿もAIに助けられて書いた。便利なものは賢く使って、浮いた時間は「非効率」を楽しむ。皆さんも、この図書館という場所を、単なる情報の保管庫ではなく、自分と向き合う場所にしてほしいと思う。

読書感想文コンクール 個人多読・クラス多読表彰について

【読書感想文コンクール表彰】

第49回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは203編、2年生からは192編、3年生からは2編、5年生からは1編、合計398編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員8名と国語科教員4名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽をたたえたいと思います。また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞（2名）

- 2 S 高田 悠月さん チーズのありかを読んで
「チーズはどこへ消えた？」ジョンソン、スペンサー著
- 5 M 石田 眞子さん 気持ちが少し楽になる心構え 「半分論」村上信五著

優秀賞（2名）

- 1 I 根来 秋帆さん 森を目指して～一人の少年の成長物語～ 「羊と鋼の森」宮下奈都著
- 2 M 奥村 結衣さん 自分の弱さと闘う難しさ 「アンネの日記」アンネ・フランク著

佳作（23名（次の19名及び氏名非公表希望4名））

- | | | |
|--------------|-------------|--------------|
| 1 M 東原 裕真さん | 1 M 水谷 真音さん | 1 E 西井 理梨さん |
| 1 E 西島 勢騎さん | 1 S 暁 樹生さん | 1 I 宮阪 歩花さん |
| 1 C 高野 和奏さん | 2 M 高田 陸音さん | 2 M 西出 健杜さん |
| 2 E 畑中 穂希佳さん | 2 S 榎本 慎也さん | 2 S 中 応介さん |
| 2 I 恒川 向日葵さん | 2 I 牧野 みおさん | 2 C 下野 恵美理さん |
| 2 C 杉山 希さん | 2 C 角 彩世さん | 2 C 橋浦 希佳さん |
| 3 C 當城 優和さん | | |

読書感想文コンクール表彰式

表彰式は1月8日（木）昼休みに校長室にて行われました。その模様は、図書館からのお知らせに掲載の読書感想文コンクール表彰式ページをご覧ください。



図書館からのお知らせ



（図書館からのお知らせ<https://www.nara-k.ac.jp/nnc-library/information/>）



【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

- 第1位 システム創成工学専攻 機械制御システムコース2年 阪本 靖大さん
 第2位 電気工学科 3年 木村 要一さん
 第3位 電子制御工学科 5年 安藤 耕太朗さん
 第4位 電子制御工学科 4年 TAN KAI QIANさん
 第5位 機械工学科 2年 奥村 結衣さん
 第6位 電子制御工学科 4年 斎藤 琢磨さん
 第7位 情報工学科 4年 稲守 剣人さん
 第8位 物質化学工学科 2年 角 彩世さん
 第9位 電子制御工学科 2年 田邊 絢都さん
 第10位 物質化学工学科 5年 喜多 秀逢さん
 第10位※ (氏名等非公表希望) ※今回は第10位が2名となりました。



[クラス多読表彰]

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



- 第1位 システム創成工学専攻 機械制御システムコース2年 (14.3冊/人)
 第2位 物質化学工学科 3年 (11.8冊/人)
 第3位 物質化学工学科 2年 (9.9冊/人)
 第4位 物質創成工学専攻 1年 (9.5冊/人)
 第5位 物質化学工学科 5年 (7.8冊/人)
 第6位 機械工学科 1年 (7.6冊/人)
 参考データ (表彰のルールにより制限した専攻科のクラス) ※
 システム創成工学専攻 電気電子システムコース1年 (8.8冊/人)
 物質創成工学専攻 2年 (8.5冊/人)
 システム創成工学専攻 電気電子システムコース2年 (7.6冊/人)

(※) 専攻科のクラスが上位5位までに3クラス以上入っていた場合、専攻科は上位2クラスに制限し、本科から上位4クラス、合計6クラスとする

全クラスの貸出冊数は「奈良高専図書館 多読表彰ページ」をご参照ください。
<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/event/tadoku/>



多読表彰ページ

令和7年度

読書感想文コンクールを終えて

《最優秀賞について》

2Sの高田さんは、スペンサー・ジョンソン『チーズはどこへ消えた?』を取り上げています。本書の内容は省略しますが、高田さんは自分自身を、恐怖で一步を踏み出せない小人「ヘム」に投影しながら、恐れを抱きつつも新たな世界に立ち向かっていく小人「ホー」の勇気ある姿勢を目指そうとしています。そして、身の回りの直感的に活動する魅力的な人々を「ネズミ」に、日常にあふれる様々な喜びを「チーズ」に重ね合わせています。このように高田さんは、今回の読書を通して自己を内省し、自身の経験や価値観、そして自分の身の回りの人たちに目を向けています。

この感想文の優れている点は、高田さんの表現したいことが非常に簡明に表現されている点です。あらすじは

ポイントを絞ってまとめられています。そのあらすじを踏まえて、自己の欠点、今後の目標、周囲にある魅力的な物事、最後のまとめへと展開していきます。視点が自分自身を出発点として、周辺へと拡大していき、整った構成と言えます。今回の読書体験により、自己と他者への理解が深まったことでしょう。今後も様々な読書を通して自己理解を深めるとともに視野を広げていってほしいと思います。

5Mの石田さんは、村上信五『半分論』を取り上げています。5年間の高専生活を通じて克服できずにいた自分の問題点に悩んでいたときに、本書に出会ったそうです。石田さんは本の内容を自身に当てはめ、自分の課題を深掘りしていきます。そして、その根本的な原因を突き止めたうえで、いかに改善していくかを真摯に考えています。自分の短所に目を向けることは苦痛を伴いますが、『半分論』とその著者である村上氏の力を借りながら、苦痛を乗り越えて成長しようとしているのです。書物には、前へ進む勇気を読者に与える力が備わっているということがよくわかります。

『半分論』は啓発書に類するものです。啓発書は常に一定の人気を集めていますが、読んで終わりにしている（あるいは購入して終わりにしている）人はいませんか。すべての読書について言えることですが、とりわけ啓発書は、その内容を自分のものとして実践に移して初めて意味があります。石田さんの読書感想文からは『半分論』の内容を自分なりに咀嚼し、今後の生活に生かしていこうという前向きな姿勢がうかがえます。読後には晴れやかな気持ちになれる、よい感想文だと言えます。

《優秀賞について》

1Iの根来さんが読んだ本は宮下奈都『羊と鋼の森』です。根来さんと本書の主人公はともに、些細なきっかけによって人生の夢や目標が決まるという経験をしています。このように登場人物との共通点があれば、その人物に感情移入しやすく、より読書を楽しむことができるでしょう。また、本書で取り上げられているピアノの調律師という仕事そのものについても理解が深まったようで、現実に自宅に来てくれていた調律師の仕事に思いを馳せています。自分の知らない世界に触れ、理解を深められることも読書の魅力の一つと言えそうです。

2Mの奥村さんが読んだ本は、アンネ・フランク『アンネの日記』です。日記という性質上、アンネの本心と、戦争の渦中にある生活が生々しく描き出されています。13歳から15歳という感受性豊かな年ごろの少女の言葉は、同年代の奥村さんにとって身に迫るものがあったことでしょう。奥村さんは、アンネの過去や自分の弱点に真剣に向き合おうとする強さに感銘を受け、勇気と希望をもらったと言います。奥村さんがアンネという他者と出会ったことで、わが身を振り返り、成長しようとしていることがわかります。読書とは、本を通して自己を見つめ、成長し、自己を確立していく営みであるということがよくわかる感想文です。

《全体について》

今年もたくさんの作品が投稿されました。自分なりにまとめようと苦心してくれたことと思います。その努力をより一層価値あるものとするために、いくつか注意点を挙げていきます。まずは漢字・日本語・原稿用紙の書き方の誤りです。誤字や誤用はそれだけで作文の価値を下げることになるので注意してください。これは今後の就職や進学に当たっても最低限求められる力です。次に、あらすじや内容紹介に終始している点です。先述の通り、読書は読んで終わりではありません。書物の内容を自分で理解・分析し、自分の血肉とすることに価値があります。文章全体に一貫性を持たせ、構成を工夫し、自分の伝えたいことを明確に文で表現するという意識をしましょう。

ところで最近、生成AIが急速に生活に浸透してきています。生成AIは非常に便利なツールですが、周知のとおりAIは誤情報も提示します。正しいのか誤っているのか、判断するのはやはり人間です。そして、正誤を判断するためには一次資料を自分で読む力が必要です。一般的に、読書のメリットとして、語彙力、読解力、想像力、集中力、論理的思考力、コミュニケーション力などが鍛えられることが挙げられます。今の社会情勢を踏まえると、生成AIに惑わされない判断力を養うこともメリットの一つと言えそうです。読書で得られる力は、きっと皆さんの財産となるでしょう。皆さんの明るい未来を思い描きつつ、来年はさらなる力作が投稿されることを期待しています。

(国語・松井)

読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

「チーズはどこへ消えた？」 ジョンソン， スペンサー 著

チーズのありかを読んで

電子制御工学科2年 高田 悠月

スペンサー・ジョンソンの『チーズはどこへ消えた?』は、人生における変化への向き合い方を寓話として描いた作品である。この物語には、舞台として「迷路」が登場する。迷路は私たちの人生の象徴であり、その中で誰もが「チーズ」を探して歩いている。チーズは人によって意味が異なり、成功や安心、愛情や健康などといった「幸せの象徴」として描かれる。そしてその迷路の中を歩くのは二匹のネズミと二人の小人（ヘムとホー）である。ネズミたちは本能と単純な行動力でチーズを探し続け、小人たちは人間らしく考えすぎたり恐れたりしながら迷路をさまよう。このシンプルな舞台設定の中で、読者は自分自身の生き方を投影することになる。

登場人物の中でも、最も印象に残ったのは小人のヘムである。ヘムは何度ホーに説得されても頑なに動こうとせず、自分の持論を展開し続ける。その姿は愚かで滑稽に見えた。だが読み進めるうちに、これは私自身の普段の姿でもあるのではないかと気づいた。例えば、イベントのために度入りのコンタクトを作ろうとしたとき、親に「一人で眼科に行きなさい。」と言われた。しかし私は一人で病院に行ったことがなく、不安と恐怖から結局行けなかった。これはまさに、変化を前に立ち止まるヘムの姿であった。読んでいるときは笑っていた存在が、実際の自分と重なった瞬間、胸に刺さった。

一方で、ホーの変化の過程には強く惹かれた。彼も最初はヘムと同じように恐怖を抱いていたが、やがて勇気を持って迷路に踏み出す。恐怖を完全に消したのではなく、抱えながら少しずつ乗り越え、新しいチーズを見つけたときには楽しさに変えていった。その姿を読んだとき、私もこうありたいと思った。ネズミたちのように単純に動くのは難しい。私は考えすぎる性分だからだ。だが、ホーのように「恐怖を抱えつつも行動に移す」ことならできるはずである。以前、友人とほぼ知らない街に無計画に遊びに行った際、新鮮さや楽しさを味わえたのは普段なら得られない体験だった。それは小さいながらも、ホーが迷路に踏み出す感覚に近かったのかもしれない。

この本では「チーズは常にどこかにあり、消えていくもの」と語られる。私にとってのチーズは、画力の向上や友人との時間、資格の合格のような大きなこともあれば、親に買ってもらうアイスのような小さなこともある。つまりチーズはそのときどきで変化する幸せの象徴なのである。だからこそ、「変化を恐れて足を止めるヘム」でいるのではなく、「恐怖を抱えながら歩みを進めるホー」でありたい。実際、私の周りにはネズミたちのように直感的に行動できる人がいて、その姿は主人公のように輝いて見える。私もまた、本当はできるのに恐怖や気遣いを言い訳にして立ち止まっているだけなのだと思う。

私は周りに気を配りすぎて固まってしまうことが多い。本を読み、今後は少しずつでも勇気を持ち、考えすぎずに行動してみたいと思った。迷路を歩くホーのように、新しいチーズを見つける過程を楽しめる自分になりたい。

この作品は短く平易であるにもかかわらず、変化を前にして立ち止まる人間の姿を鋭く映し出す。私と同じように「ヘムみたいだ」と思う人間は多いだろう。だからこそこの本は一度読んでみる価値がある。新しいチーズのありかを知りたいなら、手に取るべき本だ。

「半分論」 村上 信五 著

気持ちが少し楽になる心構え

機械工学科5年 石田 眞子

私は、グループワークで他者に自分の意見を発表することが苦手だ。奈良高専に入学し、五年間が経過しようとしているが「苦手を得意に変える」ことができていない。年々、グループワークの機会は増える一方だが、積極的に考えを発言できない自分に自己嫌悪していた。このような思いを抱いていたときに、本屋に立ち寄ると本書の帯に書かれていた「完璧ではない人間の考え方。論理と理性に柔軟性を取り入れた、不確実な時代を生き抜く新思考術」がふと目に入った。完璧ではない私だからこそその考え方を手に入れたと感じたことが、本書を読むきっかけとなった。

本書は、SUPER EIGHTのメンバー、会社員、NPO活動、編集長など、異色の経歴を持つ村上信五氏が、幅広い分野から得た経験や思考から生まれた「半分論」について筆を執っている。「半分論」は、数多くある選択肢を二つに絞り、その後の決断を二つに選択肢を分けることから、物事を俯瞰することが出来るようになる考え方である。本書は、人生において肩の力をもう少し抜いて毎日を過ごしたい人へ「人生の選択肢を増やす」後押しをする。

私は、本書の「簡単な答えで構いませんので、考えることをやめないでください。」という文を読み、改めてグループワークでの自分自身の行動を振り返る機会となった。グループでものづくりを行う授業では欠かせない話し合いだが、発言する時間になると「私よりみんなの方が良い意見だろう」、「こんな意見を言っても共感してはもらえないだろう」と必ず考えてしまい、自分の意見を犠牲にしてまで他者の意見に賛同してきた。また、自分自身の役割に悩んでいたとしても、他者にどのように助けを求めればよいのかわからず、一人でやりきらなければと背負い込んでいた。

本書を読み進めていくなかで「出来るところまでやりきったなら、全て自分のみで対処せずに残り半分は周りに甘えていいくらいの心構えを作ってみてください。」という文章に出会い、私に足りていなかったことが見つかったように感じた。これまで、自分の出来るところまで全力でやりきっていても最後までやらなければいけないという気持ちが強かった。しかし、この文章を読んだことにより「半分論」ともいえる「割り切り」という意識が足りていないことに気づいた。人には得手不得手があるのだから、得意な一方には全力で取り組み、追求し、苦手な一方は他者に委ねるくらいに考えることが出来れば、少しは気持ちが楽になると改めて気づくことが出来た。

私は、これまで他者の意見を気にしすぎていたように思う。また、役割は全て自分だけでやりきらなければいけないと、なにごとにも一人で背負いすぎていたことに反省した。

これからは、他者の意見に賛同するだけでなく、私らしい意見を他者に伝えることを大切にしていきたい。また、完璧ではない私だからこそその「出来るところまでやりきったなら、全て自分の身で対処せずに残り半分は周りに甘えていいくらいの心構え」を持ち、もう少し肩の力を抜いて、楽しく生きていきたい。

優秀賞

「羊と鋼の森」 宮下 奈都 著

森を目指して ～一人の少年の成長物語～

情報工学科1年 根来 秋帆

「羊と鋼の森」。私はこの本のタイトルを最初に見た時、どんな話なのか全く想像がつかなかった。しかし、あらすじを見て、この本を手にとった。なぜなら、私はピアノに馴染みがあったからである。

ある日の放課後、そのとき教室に残っていたからという理由で、主人公の外村は先生から来客の板鳥というピアノの調律師を体育館に案内するように頼まれた。当時の彼にとって、ピアノも調律という言葉も未知のものだったが、板鳥の調律したピアノの音を聞いて、胸を打たれた。そして、その出来事から、彼は調律師を目指し始めたのだった。高校卒業後は専門学校で調律を学び、その後、無事地元北海道の楽器店に就職した。そして、その楽器店に勤めている個性的な先輩たちの仕事に同行し、個人宅やコンサートホールなどの様々な場所で調律の現場に立ち会い、学んだり、悩んだりする。そうした経験を通じて、彼が一人前の調律師へと成長していく姿が描かれているのが、この「羊と鋼の森」という本だ。外村は先輩たちとは違い、とても平凡だ。もしあの日の放課後に体育館への案内役を任されなければ、板鳥と出会うことも、ピアノに触ることもなかっただろう。ピアノで何か演奏できるわけでも、音楽に詳しいというわけでもない。ただ、「森の匂いや景色が思い浮かぶ音」という自分が目指したい音のイメージがあった。ここに、私も通じるものがある。私は中学生の時、使っていたスマートフォンがネットウイルスに感染しそうになったことがある。私はプログラミングができたわけでも、情報技術の知識があったわけでもなかった。しかし、その出来事をきっかけに、「情報技術の力で多くの人を助けたい」と思うようになった。そして、今まで全く考えたことのなかったセキュリティエンジニアという夢を持つようになったのである。このように、夢というのは、まさに偶然のような出来事から生まれるのだと感じた。現在、私はその夢をかなえるためにも高専に通っている。まだ一年生だが、それでも彼のように悩むことは多々ある。授業についていけなかったり、周りの人よりも実験のスピードが遅れてしまったりするなどだ。自分には才能がないのではないかと不安になる時もある。しかし、この物語の中で板鳥の言った、「焦ってはいけません。こつこつ、こつこつです。」という言葉にとっても励まされた。すぐに結果が出なくても、地道に努力を重ねることが大切なのだと、改めて気づかされた。冒頭に述べたように、私にはピアノを習っていた過去がある。そのため、たまにピアノの調律をするために家に人が来ていたことがあった。当時は、何をやっているのかわからなかったが、そのおかげで私は気持ちよくピアノを弾くことができていたのだと、今になって思う。調律師について今まであまり考えたことはなかったが、この本を読んで調律師の大変さがわかり、あの時の人に感謝したいと思った。さて、最後にこの本のタイトルについて触れたいと思う。本の後ろの方にある解説によると、実は「羊と鋼」はピアノを構成する素材らしい。その素材がある「森」は外村が育った場所であり、そして、彼が目指している音のイメージでもある。この本を読み終えたあとで改めてタイトルの意味を考えると、感慨深い。

これは一人の少年のあたたかい成長物語である。この本を読んだ読者は、私のように、外村の成長する姿に勇気づけられ、自分も頑張ってみようと前向きな気持ちになれるだろう。

「アンネの日記」 アンネ・フランク 著

自分の弱さと闘う難しさ

機械工学科2年 奥村 結衣

国語の授業で習った文章に、戦争の記憶を受け継いでいくためには、出来事を自分が体験したこととして受けとめる必要がある、とありました。私は戦争について学んできたつもりです。でも、どこか自分事として感じられていないところがありました。そこで、戦争を生きた人の気持ちをもっと知ろうと思い、私と年の近い女の子が書いた「アンネの日記」を読みました。

この日記が書かれたのは1940年代で、ドイツのナチス党によりユダヤ人への迫害が行われていました。ドイツで暮らしていたユダヤ人のアンネ・フランク一家は高まる反ユダヤ人感情を危惧し、オランダへ移住します。ですがやがてオランダもドイツに占領され、そこでもユダヤ人迫害が進み、アンネの姉マルゴに労働キャンプへの召集令状が来たことをきっかけに一家は潜伏生活を始めます。

アンネは誕生日に貰った日記帳に、自分の気持ちを打ち明けていきます。家族、将来、自分の性格のこと、共感できることが多くあり、まるで自分の気持ちを読んでいるようでした。しかしそれ以上に、アンネに教えられたことも多いです。

日記の中で、1年前の自分を振り返る場面があります。アンネは過去の日記を読み、どうして自分はこんなに激しい怒りを書かずにはいられなかったのだろうと不思議に思います。私も過去の自分を思い出すことがあります。そんな時過去の自分の考えの浅さに恥ずかしくなり、それ以上考えるのをやめます。しかしアンネは、その時の自分の気持ちを理解しようと努め、その結果自分の欠点に気が付きます。私もそうしなければならなかったのだと後悔しました。自分で自分の成長する機会を奪っていたのです。

特に目を覚まさせられた言葉があります。『自分は弱い性格だ』と言いながら、そのくせ平然としてられるのって、私にはとても考えられません。』私も自分の弱さは十分わかっています。時に私は自分の存在に耐えられません。だから私は強くなりたいと思ってきました。でも、私は本気で弱さと向き合い闘おうとしているのでしょうか。例えば、私は声が小さく、それを直したいと思っています。でも、どうして小さいのか、具体的にどんな練習をすればいいのか、真剣に考えたでしょうか。アンネは、強い人です。自分の欠点と向き合い、それを直そうと努力していました。私は、この本を読んで自分の欠点と真剣に向き合うことに決めました。

私はこの日記からたくさんのお話を教えてもらいましたし、勇気も希望ももらいました。こんなに強く、他人の悲しみに寄り添い、将来を楽しみにしていた私の2歳下の女の子が、ユダヤ人だというだけで収容所に送られ、そこで亡くなってしまったという事実を思い出した時、私は悲しくてたまらなくなります。そしてそんな子達は今もいます。私は苦しくてたまりません。「アンネの日記」を読んでからますますつらくなりました。しかし今はそれをどうにかするアイデアも力も何もありません。だから、私は今できることを一生懸命して、人の気持ちに寄り添いたいです。

図書委員会の活動について

機械工学科4年 加藤 良太

はじめまして。2025年度図書委員長の加藤良太です。昨年度に引き続き、図書委員長として活動しています。

今回は図書委員会の活動について、この場をお借りして紹介させていただきます。

図書委員会には、福袋・読書週間プロジェクト、高専祭プロジェクト、広報・雑誌プロジェクトという3つのプロジェクトがあります。基本的に、図書委員はいずれかのプロジェクトに所属して活動しています。

福袋・読書週間プロジェクトは、委員が厳選した本2冊が入っている福袋を貸し出すというイベントを毎年年末に行っています。委員がポップのような紹介文を描いて貼っているのですが、かなり凝ったものが多く、感心しながら作業しています。

高専祭プロジェクトは、毎年11月に開催される高専祭について活動するプロジェクトです。今年度は模擬店を出店し、委員でデザインしたしおりを販売しました。初めての試みで試行錯誤の連続でしたが、無事完売することができました。

広報・雑誌プロジェクトは、この図書館だよりの制作など、広報に関することを行っています。今年度は例年の広報業務に加え、図書館1階の雑誌コーナーの雑誌の入れ替え・見直しを行う予定です。

また、所属しているプロジェクトに関わらず、委員全員が参加するブックハンティングを半年ごとに行っています。前期はオンライン、後期はオフラインで開催しており、クラスメイトからのリクエストや委員の希望図書を購入し、図書館に導入しています。委員の選出した本を取りまとめるときがあるのですが、最近タイトルを聞くような話題の本から専門の授業か趣味で読むのであろう技術書まで幅広く選ばれており、高専生らしいなとよく思います。導入された本は、しばらくの間は図書館1階のスペースのブックハンティングのコーナーに配置されていますので、是非ご覧ください。

図書委員会は委員会という性質上、大半の委員が兼部しており、活動も不定期なので負担になりやすいです。ですが、他の委員会よりも活動量は多く、充実した活動が出来ると思います。

本好きはもちろんのこと、活動に少しでも興味のある奈良高専生は是非、図書委員会に参加してみませんか？

新刊のご案内（その1）

令和8年1月に【新刊コーナー】へ排架した新刊図書をご案内します。

【第174回芥川賞受賞作品】	『時の家』	鳥山まこと著
	『叫び』	畠山丑雄著
【第174回直木賞受賞作品】	『カフェーの帰り道』	嶋津輝著
【第174回芥川賞候補作品】	『BOX BOX BOX BOX』	坂本湾著
【第174回直木賞候補作品】	『白鷺立つ』	住田祐著
	『神都の証人』	大門剛明著
	『家族』	葉真中頭著
	『女王様の電話番号』	渡辺優著
【教員からの推薦図書①】	『公式TOEIC Listening & Reading Part3&4 音声速解』	
	『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 11』	
	『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 12』	

「 剃 刀 」

志賀直哉 著

情報工学科3年 三原 瑚桜

剃刀の扱いにおいては右に出る者のいない床屋の店主はその日風邪を引いていた。奥の部屋で休んでいたが、季節柄客が多く、表の喧騒が耳につく。店番は若者二人に任せていたが、繁忙期に腕前の劣る彼らだけでは頼りない。熱で苦しい身を横たえながら、店主は一人床の中で苛立っていた。そんなとき、剃刀を夕方までに研いであくれと言う客がやってきた。重い体、震える手。どうしても思うように研ぐことができない。若者に任せればいいと気遣ってくれる女房さえも鬱陶しい。店主は癩の強い男であった。自分の満足いく仕事をしなければ気が済まない。客の顔を剃るときも、毛の一本一本にまでこだわって剃った。

『剃刀』は小説の神様という異名を持つ志賀直哉の初期の作品である。志賀直哉は無駄を極限まで削ぎ落した文章で、見たものを見たままに、感じたものを感じたままに表現することを得意とした。はっきりした筆致で描かれる景色や、快/不快を率直に表した感情は、ときに現実以上のリアルさでこちらに迫ってくる。

氏の小説の中でも『剃刀』は特に、その迫り方に恐怖を感じるのだ。腕をじっと見つめていた。体は置物のように重かった。天井を眺めていた。蠅がたくさんとまっていた……というように、小説は店主の視点で淡々と進行する。店主の動きと感覚にびったり張り付いて追いかける文章は、常にピリピリした緊張感をはらんでいる。それは店主が、熱があるのに刃物を扱っているというシチュエーションのためだが、一部分でも言葉を変えたら駄文に成り下がってしまいそうなギリギリのバランスを保って成立した文章が、この緊張感をさらに高めている。

なんの虚飾もない文章が、現実を超え、時間の進み方さえも自在に操って、読み手を侵食していく。この作品の魅力は、自我が飲み込まれる感覚を味わえることだ。熱が出て苛々する、その気持ちは共感しやすい。だが、『剃刀』は共感するとか同情するとか、そんな次元の話ではない。読んでいるうちに主人公と一体化して、店主の知覚が自分の知覚に、店主の思考が自分の思考になる。店主の言動に何の疑問も抱かなくなる。

そうして最後の最後、高められた緊張が一気に弛緩し、小説世界から突き放されたとき。持ち主に帰ってきた思考で、本当の意味で店主に共感するのか、はたまた恐怖するのか。気になった方は「志賀直哉 ちくま日本文学021」に収録されているのでぜひ読んでみてほしい。

新刊のご案内 (その2)

【教員からの推薦図書②】

- 『公式TOEIC Listening & Reading 500+』
- 『英検準2級プラス対策 予想模擬テスト』
- 『すべての答えは小学校理科にある 電気・磁気編』
- 『大学初年級でマスターしたい物理と工学のベーシック数学』
- 『デジタル化時代の Additive Manufacturing の基礎と応用』
- 『13歳から鍛える具体と抽象』 『基礎からわかる論文の書き方』



「イン・ザ・メガチャーチ」 朝井リョウ 著 情報工学科5年 升岡 瑞葉

「最も怖かった本は何ですか？」と聞かれたら、私は迷わず朝井リョウさんの「イン・ザ・メガチャーチ」を挙げます。ホラーでもミステリーでもなく、熱心なファンを中心に、推し活や消費活動を組み込んだ「ファンダム経済」を構築する運営側と、それにのめり込んでいくファンの姿を描いた物語です。これまでも推し活を題材にした小説はたくさんありましたが、ファンダム経済を仕掛ける側の視点から描いた作品はとても新鮮でした。

物語は三人の視点から展開されます。

男性アイドルを売り出すための「物語」を設計するレコード会社勤務の久保田。舞台俳優を応援していたものの、ある報道をきっかけに状況が一変する派遣社員の隅田。繊細な性格ゆえに生きづらさを感じていたところ、あるアイドルと出会い深くのめり込んでいく大学生の澄香です。推す側だけでなく、仕掛ける側のロジックが丁寧に描かれているからこそ、私たちが注いでいる情熱は、実は計算され、誘導された消費活動であるという現実を突きつけられます。

この本を読んで一番怖かったのは、物語の中に「自分」を見つけてしまったことでした。私も大学生の澄香と同じように、推しの幸せを願い、その存在に救われてきた一人です。誰かが作った物語に没入し、狂乱している自分を客観視してしまった瞬間、強烈な苦しさに襲われました。しかし、この感覚は推し活に限った話ではありません。視野を狭め、「これが自分の幸せだ」と信じることで、人は生きやすくなることがあります。幸せの定義が無数にあるこの世界で、あえて視野を狭めることも一つの生存戦略だと本作は示します。同時に、それは本当に幸せなのかと静かに問いかけてもくるのです。

朝井リョウさんの作品は、常に時代を鋭く切り取ってきましたが、「イン・ザ・メガチャーチ」もまた、現代の推し活ブームを非常にリアルに描いた一冊です。一度読むともう以前の自分ではいられません。この時代を生きる私たち自身の物語として、ぜひ手に取ってみてください。

新刊のご案内（その3）

【教員からの推薦図書③】

- | | |
|----------------------------|-------------|
| 『MATLABではじめるプログラミング教室』 | 『金属積層造形大全』 |
| 『MATLABで学ぶ物理現象の数値シミュレーション』 | 『仮説行動』 |
| 『データ科学のための微分積分・線形代数』 | 『解像度を上げる』 |
| 『電気回路素子を理解するための電気磁気学』 | 『電気法規と施設管理』 |
| 『CV波を正しく解釈する電気化学測定入門』 | 『分子の薄膜化技術』 |

編集後記

図書館だより第83号に執筆いただいた皆様、ご寄稿ありがとうございました。最近の図書館は利用者が増大し、定期試験前は1階も2階もラーニングcommonsも超満員。対策として、コロナ禍に倉庫へしまい込んでいたテーブルや作業台を引っ張り出し並べましたが焼け石に水。続く対策として、夜間職員さんの協力を得て定期試験1週間前にラーニングcommonsの解放を19:45まで延長することにしました。図書館として出来得る限り学習の場を提供しますので、勤勉に大いに励んでいただきたいと思います。



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/nncnt-library/>



奈良高専図書館